

# 見守る介護を目指して

～自分のペースで！～

施設名：もとぶふくぎの里

発表者：金城雄作

## 【はじめに】

認知症の原因となるさまざまな「疾患」の特徴を知っておくことは認知症の人の暮らしを支えていく上でとても重要である。今回レビー小体型認知症の疾患があり小刻み、突進歩行が見られ転倒リスクの高い利用者様に対し施設内自立歩行を目的に取り組んだ事例があるのでここに報告する。

## 【事例紹介】

氏名：Y・T様 年齢：83歳 要介護5

病名：レビー小体型認知症、多発性脳梗塞

## 【入所までの経過】

平成21年10月頃から症状が出現しビー小体型認知症の診断を受ける。その後誤嚥性肺炎での入院歴はあるが、認知症デイケアや訪問看護を利用し在宅生活を送っていた。平成28年3月不眠とそれに対する幻覚等の症状悪化により家族の介護負担が増え入院。その後、療養目的で同年5月24日、当施設入所となる。

## 【入所してから現在まで】

入所時の状態として、歩行は軽介助にて可能ではあるがすくみ足や小刻み歩行、動作緩慢がみられていた。木椅子からの立ち上がりが頻回でフラツキがみられるが一人で歩き出す事があり転倒の危険性が高くマンツーマン対応とした。傾眠の強い時は車椅子対応とし、そのつどの状況によって介助方法検討し対応していた。本人の意に反する事をする事、表情が硬くなる事や手の震えが増強する様子がみられた。そのため、本人の意思を尊重するよう心がけ、歩行時には本人の行きたいところに付き添い本人が座れば横に座るなど本人の

ペースを中心に対応した。入所時と比べると表情も徐々に柔らかくなってきた。9月に入ると歩行能力は向上してきたが、時々小走りがあり転倒に注意し対応していた。変動は有るものの、ADLの状態はゴールとなっていると判断されたため、ご家族に現状の報告を行った。10月からはヘッドギア・ヒッププロテクターを使用し、その時の状態にもよるが歩行状態を確認しながら現在は遠監視見守りでの対応している。時々小走りが見られるため、その都度声をかけ対応している。

## 【考察】

転倒リスクを回避する為には、その行為そのものを制止するのではなくその方の気持ちに寄り添い向き合うことが大切である。歩きたい気持ちを尊重し付き添う事で歩行状態も改善した。また、転倒時の外傷を予防するためヘッドギア・ヒッププロテクターを使用してから、歩行状態を確認しながら遠監視見守りで所在確認となった。その事で自分のペースで過ごすことができ精神的な負担も軽減されているのではないかと考える。

## 【まとめ】

転倒予防のために私たちができる事は、日常的に歩行状態や心身状態を観察し転倒の危険性を見逃さないことが重要である。さらに予防体操や機能訓練を実施し活性化を図る事で予防に繋げることが期待できると考える。これからも生活の質を維持、継続していけるよう支援していきたい。

# トイレでスツキリ！！

## ～トイレ誘導対策から見てきた本人と職員の変化～

介護老人保健施設 亀の里

○喜友名深雪(Cw)

知花けい子(Cw) 菊池祐美子(Cw)

新城昭太(Cw) 又吉達(Dr)

### 【はじめに】

弄便行為が見られた利用者に対しトイレでの排便訓練を行った過程と、取り組みを行ったことで利用者・職員双方に相乗効果が生まれたのでここに報告する。

### 【事例紹介】

42歳 男性 要介護度4 Wolfram症候群（糖尿病・視覚障害・尿崩症）、神経因性膀胱・尿閉、シンナー吸引による精神疾患（独語・空笑・幻聴）、他。41歳、多発性脳梗塞により右半身麻痺・高次脳機能障害（失語症・失行・失認・意欲低下・注意力低下・記憶力低下・遂行機能低下 等）発症。

### 【入所してからの様子】

脳梗塞発症後、回復期病院を経て当施設入所となる。入所時、意思疎通困難で自発性・意欲・表情乏しくベッド臥床傾向。入所4週間目頃から決まった単語を連呼するようになり、不穏症状や危険行為増加。同じ頃、弄便が見られるようになった。トイレでの排便が可能となれば不快感の軽減・QOLの向上に繋がると考え、トイレでの排便能力の獲得に取り組むことにした。

### 【方法】

毎日の定時トイレ誘導。トイレに座る目的を伝え、本人の意思を確認。自ら便意を表現できるようにする為、発語の促し。音楽療法・生活リハビリの実施。記録ノートを用意し、対象者と関わった時の内容を記録し情報の共有を図った。

### 【経過及び結果】

トイレ誘導開始当初しばらく空振りが続いたが約1カ月後にトイレでの排便に成功。後にタイミングが合えば可能となった。また、発語訓練について

はSTに介入を依頼。介入当初あいまいであったYES-NOの意思表示が、生活の場面でも積極的にコミュニケーションをとることで、表現可能となり語彙の増加も認められた。脳や心身機能の活性化を図る目的で取り入れた音楽療法・生活リハビリにより自然に共有する時間が増えた。些細な仕草や表情・表現の違いにも気付きやすくなった。しかし、自発的な便意の表出及び排便リズムの把握までは至らず、便失禁・弄便することも度々あった。また、排尿、排便障害の影響で便意自体無かった可能性も考えられる。

### 【考察・まとめ】

トイレでの排便後は満足げな表情が見られた。取り組みのきっかけである不快感の軽減が達成された。目標達成に至った要因として、職員側からの積極的な関わりが重要なポイントだと考えられる。このことが精神的安定に繋がり信頼関係が生まれ、その結果、リラックスしてトイレでのスムーズな排便に繋がったのではないだろうか。また、日常生活全般においても、意欲や活動性・自発性が向上した。同時に表情豊かになり笑顔も増えた。

職員の変化としては、声掛けが多くなり本人に寄り添ったケアを地道に行うことの大切さを実感できた。今までなかった一面や新たな可能性を発見するたびにやりがいを感じ、さらに関わりを深く一歩踏み込んだケアへと好循環が生まれた。

一方で、便意あいまいな方に対しての排便リズムの把握という課題が残った。今後も私たち介護職員は利用者の生活に深く関わる者としてQOLの向上に貢献すべく残された課題に取り組んでいきたい。

# 急変時の介護の役割

施設名：和光園

発表者：島愛美

比嘉久美子 与那嶺太助

大木理奈 伊良皆香

## 【はじめに】

私たち和光園2F病棟では当施設の中でも看護職員が少なく、急変時にDrコールや必要物品の準備など介護が担う役割が多い。そこで、今回2階介護職員が急変時の介護の役割を理解しているかを確認。職員がきちんと役割を把握し、速やかに行動出来ることを目標に取り組んだことを報告する。

## 【期間】

平成28年9月9日～現在

## 【対象】

和光園2階病棟介護職員

## 【方法】

- ① アンケート調査
- ② ICLS委員と協力し豆テストの作成
- ③ テストと復習

豆テスト→復唱を中心とした復習  
→確認テスト

豆テストを職員に配布し採点。復習は期間を2週間に設定し、一日2回朝・夕の申し送り時にリーダーを中心に行う

- ④ 勉強会

## 【結果】

- ① 全員が急変時の対応方法の勉強会や研修に参加していたが、5年以上参加していない者もいた。内容については、あいまい、覚えていないとの解答が多く、全員が急変時の対応に不安を感じていた。
- ② ICLSのマニュアルをもとに豆テストを作成した。業務の中で、職員の負担にならないように問題数を5問以内に設定した。

- ③ 1クール目の実施では、豆テストを行った結果6割強の正解率だった。復習については復唱方法を申し送りで伝えたが、伝達不足で定着することが出来なかった。確認テストでは正解率が9割弱であった。

2クール目、豆テストの問題内容を変え実施し正解率5割弱。復習方法の伝達は、申し送りに加え職員への声かけを多くし、実施チェック表を作成することで毎回実施することが出来た。確認テストでは、正解率が9割を超えていた。

- ④ 酸素ボンベのセッティング方法については、テストで表すことが出来ないため定例ミーティングを利用し勉強会を行った。ICLS委員のデモンストレーション後、実際の酸素ボンベを使って職員の練習を行った。また、職員から意見があったノートパソコンの無線LAN接続方法の確認も同時に行った。

## 【考察】

アンケートの結果、緊急時の対応について全員が不安と回答があり、勉強会や研修に参加して時間が経過していることが一つの要因と考えられる。

また、確認テストの結果、まだ一部の職員が理解出来ていない事から継続して取り組みを行い、職員一人一人が担う役割の重要性を認識していく必要があると考える。

## 【まとめ】

今回の取り組みでは、目標達成には至らなかったため周知を徹底していきたい。また、今回は急変時の介護の役割についての試みであったが、感染対策や身体拘束にも応用することで職員の意識向上につなげていきたい。

# 保湿剤で皮膚トラブル予防

～オリジナルクリ～ムを作製してみても～

施設名：おおざと信和苑  
発表者：◎神谷 憲（看護職）  
共同研究者  
折田 興紀・津嘉山 明海  
嶺井 礼子・渡真利 誠  
桃原 牧子

## 【はじめに】

老化に伴う皮脂や汗の分泌量低下は、高齢者の皮膚乾燥の原因である。乾燥した皮膚は過敏に反応するため衣類のしわや排泄による湿潤などが刺激となり辛い痒みが発生する。「痒み」は不眠やかきむしりによるスキンケア（外傷性創傷）の要因となり強いストレスを生むことになる。そこで、従来スキンケアの一環として習慣的に使用してきた保湿剤の効果、使いやすさ、コストの面を検討その効果を検証したので報告する。

## 【目的】

高齢者の乾燥による皮膚トラブルを予防する。

## 【方法】

- 1、 従来の保湿剤使用状況を検討する。
- 2、 シンプルで有効な保湿剤を考案。オリジナルクリ～ムの作成方法をマニュアル化する。
- 3、 オリジナルクリ～ムの効果の検証

\*観察対象者1名

K・Tさん 106歳 女性

\*期間：平成27年9月～平成29年1月  
入浴後そのままの状態と保湿ケアした状態で皮膚の観察を行う。比較のため写真撮影を行い検証する。その際条件を統一するため入浴日、使用するボディーシャンプー等は通常通りとする。

## 【結果】

- 1、 保湿や掻痒のケアはその日の担当スタッフに委ねられていたため改善には個人差があった。
- 2、 使用する軟膏類によっては菲薄な皮膚に刺激が強く痒みを伴う事があった。
- 3、 オリジナルクリ～ムを作製するに至り、

思考錯誤の未作製方法をマニュアル化する事でフロア～スタッフ間での周知や補充作業もスムーズに行えた。

- 4、 オリジナルクリ～ムを浴室や処置台、オムツカートに配置する事で手軽に統一した保湿ケアが出来た。
- 5、 検証のために行った皮膚の状態観察では、写真からも明らかな有意差が見てとれた。

## 【考察】

保湿剤の検討していく中で保湿効果が高く、お年寄りの皮膚に負担の少ないオリジナルクリ～ムの作製に至った。アロマオイルを添加したおかげで匂いが香りに移行でき、アロマオイルにはそれ自体にアロマセラピーとして確立された治療効果がある事は周知されているところである。アロマオイルの種類別効能を踏まえて添加する事で日中の活性化や不安感軽減、認知症の進行や症状の改善に役に立つことも期待できる。今回リラックス効果の高いラベンダーオイルを使用しているため、夜のオムツ交換時に使用すれば安眠を促す効果も得られ、乾燥からくる痒みストレスも沈静出来ると考える。

## 【まとめ】

オリジナルクリ～ムは手軽なスキンケアオイルとして有効である。アロマオイルの効能を併せ持つマッサージオイルとして面会にいらした家族の手の温もりが伝わるスキンシップアイテムとしても利用できる。活用方法をさらに検討し日常生活の場に取り入れ信和苑オリジナルクリ～ムとして広めていきたい。

# 安全対策の取り組み

～安全を考慮した生活環境設定～

施設名：エメロードてだこ苑

発表者：高原 英之

島袋 律子 安里 真紀

## 【はじめに】

当苑では、医療ニーズの高い利用者や重度の認知機能低下がみられる利用者など多種多様なケースの方々が入所されている。

ヒヤリハット・事故は毎月数件の報告があり、利用者の安全を守る為色々な取り組みを実施してきた。今回件数の減少を目標として再度安全対策を見直していくため安全対策委員、リハビリ課との協力をえて安全対策に取り組んだ事を報告する。

## 【取り組み】

発生ゼロに向け損害軽減対策/環境設定の取り組みを開始する。

平成 28 年 1 月～ヒヤリハット/事故報告書の集計（今回は転倒/転落、未遂のみ集計する）

・月別集計 ・発生場所 ・ヒヤリハットの原因

取り組み開始時期 平成 28 年 4 月

・ヒヤリハットの記入漏れが多く極力入力を実行

①発生場所⇒居室が多数、次にトイレ、フロア

・ベッドより起き上がり単独歩行

・不安定なままの端座位・単独トイレ使用（要付き添い者）

・車椅子の自操があり、行きたい場所へ移動する。

職員の目が行き届かない場所で転倒

\*臥床中は排泄や起きたい！の訴え時発生が多い

## 【経過及び取り組み方法】

転倒、転落の報告を重点に対策を検討

対策方針⇒ 1. 発生頻度を減らす

2. 損害軽減策

3. 利用者様の情報共有

発生頻度の多い居室中心に対策を行う

(1) 居室周りに提示物設置の実施

(2) 自力トランスは不安定、サドルを取り外した時にピンチセンサーが ON になる工夫

(3) 排泄の訴えが多くポータブルトイレを自力で使用出来ると判断して L 字柵を 2 本設置

(4) ダンボールボックスを作成設置して損害軽減する

(5) 昼間への変更 ヘッドギア装着

(6) 車椅子自操によりフロアから離れることを踏まえて車椅子へ表示。見守り対策をする事で離れていても職員が居場所の確認、声かけを行う事で共有認識

## 【対策後の状況】

・4 月～ヒヤリハット＝極力入力を実行し件数は増え始める。環境設定後のヒヤリハットが始まるが想定内

\*ピンチセンサーの音で居室訪室、本人が何を要望しているかを傾聴する事で立位不安定なままベッドに自力トランスを行う事がなくなった。

\*L 字柵を 2 本設置、ご自身で排泄が出来る様になり単独歩行でトイレに向かう事がなくなった

\*夜間サドルがない場所からダンボールボックスへ移動端座位になる事があるが、転倒、転落までの事故発生減少

\*居場所の確認を行い『〇〇さんは居ますか?』と職員間で共有認識が身についてきた。

《想定外》普段と違う状況が発生⇒感染症が発生した 9 月は事故発生が多く出た。隔離を行う事で目が行き届かない事がでてきた事が要因。隔離部屋対応中の安全対策も必要な事も判り、事故発生後今回の取り組みを隔離者へ取り入れる事も出来た。

## 【考察及びまとめ】

『あぶないから』『以前にも転倒したから』と不安で過剰に対策することなく環境造りを実施できた。納得、安全な環境にするために模索し準備から作成まで職員、利用者様の協力（ボックス作成）で対策案が出来上がった。

今後転倒、転落以外の剥離、異食行為などの安全対策も同時に進める事とした。

今までの事が十分とは言えないが、今後、向上させる為ヒヤリハット/事故報告の様式を新たに作成し検討していく事とした。

これからも利用者様の生活動作、行動の分析を行い安全に配慮した環境設定を行って行きたい。

# やってみよう！口腔マッサージ！

～目指せ、お口の機能アップ～

施設名：介護老人保健施設桜山荘

発表者：介護福祉士 大城順子

## 【はじめに】

当フロアでは毎週月曜日に、口腔ケアチーム（歯科医師、歯科衛生士など）が利用者様の口腔内の確認と口腔マッサージ、口腔体操を行なっている。週1回だけでなく毎日行うことで何かお口の働きに変化があるのではないかと考え、今回の取り組みを行った結果を報告する。

## 【取り組み内容】

口腔マッサージをすることで唾液の分泌量の増加や口周りの筋肉の向上に繋がる。また、口腔体操を行うことで嚙む力や飲み込む力の向上に繋がる。両方を取り入れることで、お口の機能アップが期待できる。

取り組み期間：平成28年7月11日～12月9日

対象者：お口の働きの維持・向上を目的とした方、誤嚥性肺炎の既往のある方、食事中のムセ込みがある方の3名に実施する。

①毎日、おやつ後の時間に口腔マッサージ（上唇、下唇、頬の内側、舌）を行う。

②毎日、昼食前にパタカラ体操を行う。

## 【事例紹介】

- ・A様（女性）93歳。要介護5  
既往歴：慢性硬膜下血腫、心源性脳塞栓症  
目標：飲み込む力の維持、向上
- ・B様（男性）86歳。要介護1  
既往歴：誤嚥性肺炎、気管支喘息、認知症  
目標：食事形態アップ
- ・C様（男性）80歳。要介護3  
既往歴：左放線冠部脳梗塞、逆流性食道炎  
目標：食事摂取量アップと義歯装着の安定

## 【結果】

- ・A様→ムセなく飲み込みが維持できている。  
以前より会話が増えた。
- ・B様→口腔内の溜め込みがなく、しっかり咀嚼ができるようになった。  
食事形態がアップした。  
歩行能力のアップ
- ・C様→義歯をしっかりとめて食事ができるようになった。  
食事形態がアップした。  
外出支援で外食ができた。  
食事摂取量にムラがある。

## 【考察・まとめ】

7月から取り組みを行い、対象者様それぞれに食事の形態が上がった方、義歯をしっかりとめることが出来るようになった方、発語が増えた方など口腔マッサージと口腔体操をすることでお口の働きの維持、向上ができるということが分かった。

しかし、本人様の好き嫌いが多く、食事摂取量アップの目標が達成できなかったケースもあった。

「どういう風にしたら利用者様が食事を美味しく食べて頂けるか」「食事形態をアップできるか」など、今回の取り組みを通じて職員間で話をする機会が増えてきた。

職員の口腔マッサージ、口腔体操に対する興味、関心が出てきたのではないかと考えられる。

今後も、多職種連携し、利用者様の口腔機能向上を目指していきたい。